

さくらびと

公害の町、日立市がなぜ桜の里になったか？

細川呉港（会員）

戦国時代、常陸の国（現在の茨城県）の北部、宮田川の上流の赤沢溪谷に銅山があり佐竹義重が掘っていたが、関が原の後、佐竹氏は秋田にお国替えとなり、後水戸藩によって採掘された。有名な寛永通宝はこの銅で造られたと言う。赤沢銅山は時には金も採れたらしいが直ぐに鉱脈が続かず廃鉱になっている。しかし、銅だけは以後、細々と、またさまざまな人によって採掘されていたが、明治38年（1905年）、ここを久原房之助が買取り近代的な、採掘、精錬が行われるようになった。

久原房之助は、実業家、後に政治家になった男で、日立製作所の創業者でもある。彼は山口県萩の生まれで、若いとき叔父がやっていた秋田県の小坂銅山で働き、労使や、煤煙などさまざまな問題を

解決し小坂銅山を発展させた男だ。長州閥。しかし私は、久原房之助という人、すぐに思い出すのが、大谷探検隊の将來品を買い取ったことだ。大谷光瑞の本願寺が経営的に破綻したあと、探検隊が持ち帰った西域の仏像や壁画、壺などを買い取り、自分の別荘に置いた。別荘は朝鮮の京城、大陸の旅順にもあったので日本と合わせて都合3か所に分散されたことになる。これが終戦でそのまま京城と旅順に残された。京城のものはそのまま韓国の国立博物館に。旅順のものも旅順博物館にある。旅順博物館のものは、戦前写真図録になり写真集を私も持っている。

明治37年（1904年）に日露戦争が始まり、銅だけではなくさまざまな鉱物資源や粗鉱の需要が急増。久原はそのタイミングで、赤沢銅山を買取り、近代的な

製法で、銅の生産を始めた。黄銅鉱を掘り、選鉱して製錬所で溶鉱炉に。赤沢溪谷にそれらの工場を建て、精錬が始まった。工場の四本の煙突から出る亜硫酸ガス

による被害が出始めたのは間もなくだった。工場の西北、山の上流の入四間村で最初に被害が出た。稲作や麦、野菜、それに桑の栽培をしていた農民たちがそれに気づいたのは、稲の葉が錆色に変色すること。下葉が枯れて捲き、落ちてしまうこと。桑の芽がしおれて成長しないことだった。桑の葉は、毎日のようにお蚕さんに食べさせなければならなかった。村民450人ほど。村人たちは直ぐに御岩神社の社務所に集まって今後の対策をどうするか話し合った。

この時の中心人物が若い関右馬允であった。その時に結成されたのが青年同志会

であった。関は、その後、日立鉾山の発展の歴史と共に30年にわたり、工場の煙害と立ち向かうのである。彼の生涯の「仕事」になった。いや生涯関わらざるを得なかったのである。すべて村人たちのためであった。

冬は西風が山の方から吹き、工場より下流にある日立地域に煙が流れ、春から夏にかけて野菜や作物が育つときには、宮田川のある赤沢溪谷に沿って海からの風が吹き上がってくる。工場周辺の山の村々は煙害を被った。煙害は作物だけではなく、工場のある周辺の山々の木々が軒並み枯れていった。山もまた村民の生活のものであった。木を切って薪をつくり、また炭を焼いた。その山がいわば赤い地肌を出してはげ山になったのである。枯れ木が山を覆った。その姿は人々にいいようのない恐ろしさをもたらした。作物を育てることに生きがいを持っている農民たちにとっては、木々の立ち枯れた山々や、赤くただれたような地肌を見せる山の姿は、自分たちの農作物が被害を受ける以上に、精神的な打撃を与えた。これに対して、日立の工場側は、角弥太郎という男が日立鉾山の庶務課長として農民たちに対応した。実はこの角という男は、久原房之助と一緒に秋田県の小

坂銅山で働いていた男で、そのときにすでに公害問題や労使紛争を経験していたのである。それがまたよかったのである。工場稼働の初期の段階から煙公害が発生することを念頭に、早くから農民に保証金を出したのである。

だが、銅の需要は高まり、久原は最初に立てた工場から少し宮田川を遡ったところ、昔、大雄院というお寺の跡を買取りそこに大きな工場を建てた。煙害はいっそう激しくなった。山々の木が枯れると、保水力がなくなり、雨が降るたびに山肌に溝ができ、それが次第に大きくなって崖崩れ、また台風のと きなどは土石流が流れた。それが入四間村の道や田畑を埋めた。会社側はそのたびに保証金を払った。明治42年に、角弥太郎は会社の費用で、農事試験場を作った。煙害に強い植物はなにかを研究するためであった。そして工場を中心に、半径8^キ、21^分後に後にオシマザクラを植えたのである。苗は伊豆の大島から取り寄せた。大島の三原山は火口近くでもオシマザクラの広大な自生地があった。煙害に強いからである。一方、工場ではいままでの煉瓦の煙突（高さ24^ミ）、これを「八角煙突」といったが、それに替わって、「ムカデ煙道」というのに切り換えた。これは工場の煙を、

煙突ではなく、山肌に沿って尾根に四角形や半円形の煙道を造り、そのまま山頂まで登らせる。しかもその煙道のあちこちに穴をあけて、煙を分散させて放出するというものである。しかもその煙道の途中に2百馬力の送風機を設置し、煙を勢いよく吹き上げるようにした。神峯山にいくつかの煙道が這いのぼった。奇妙な風景であった。このころの専門家の考え方として、濃い亜硫酸ガスをできるだけ薄め、広い範囲に噴出するという理論であった。山のあちこちから、黄色い煙が出た。これが山肌を登るムカデのように見えた。

だがこれもまた完全ではなかった。製錬所の方や社宅に流れてくる煙は減ったが、山の上の村々には減らなかった。この間にも、枯れた木のたくさんある山で、山火事が発生したり、また坑道では落盤事故も起こった。

農民は咳をする人が多くなり、馬が死んだ。

角弥太郎は、庶務課長でありながら、久原の信頼あつく、辣腕をふるってさまざまな提案をした。その日によって風向きが替わるので、煙が入四間村や山の方に流れるときは、工場の生産を縮小し、煙の噴出を少なくなるようにしたのだ。風向きや気流は工場の生産にとって大事

な要件となった。角はさらに、茨城県内に自前で気象観測所を8か所作った。なかでも神峯山の観測所を中央観測所とし、あとの7か所からデータがすべて集まるようにした。明治43年のことである。まだ気象庁の観測所が1県にひとつくらいしかない時代であった。あとの6か所は、高鈴山、原、下深、高萩、大門、瑞龍、洪沢である。これにより、東北風のときは高鈴山の方に煙が流れるとか、また朝と夕方は煙は台地を這いやすいとか、さまざまなことが分かってきたのである。

一方、関右馬允の方は、常に農民からの訴えがつきなかった。こんにゃく芋の葉が枯れたとか、たばこの葉がしおれたとか、煙害は入四間村だけでなく、2町10か村に及んだ。また山林の被害はもっとひどく3町18か村に広がったのである。関は、その都度自分で調査に行き、まだ珍しかった写真機を買い、写真を撮った。それを角弥太郎に見せたのである。

農民はその都度保証金をもらったが、お金さえもらえばいいというものでもない。こんなことの繰り返しは、人々に絶望感を芽生えさせた。だめになるのが分かっている、作物を植え、枯れたら保証金をもらう。そういった生活には夢がないのだ。関は村人たちをつれて角が提案した村を

上げての移住、そのための候補地を那須高原まで見に行った。那須の250町歩の土地は、まだ藪や林の状態だった。木を切って根を掘り、それから畑を作らねばならなかった。農民たちが一番気にしたのは、農業用水の確保が難しいことだった。畑を作るのにはいいが、農民たちはやはり米を作りたいのである。稲作には、それなりの水利がないと田んぼは作れないのだ。それでその話は流れた。

大正2年になって、政府から工場にお達しがあった。亜硫酸ガスの濃度を10



枯れた山稜を這い上るムカデ煙道（隧道）と山腹のダルマ煙突。最後の山頂の煙突は世界一になった。1981年（昭和56年）銅山閉鎖後、12年たって上3分の2が台風で倒壊した。

00分の1・5以下にするように――。そして煙害予防調査会からの勧告で、新しい煙突を作るようにと指示があった。その煙突は新発想の煙突だった。高さ36㍎、太さはなんと18㍎の太くて短い大きな煙突だった。その煙突の根本に周囲に13個の大きな穴があいていて、そこから空気を取り込んで、煙と一緒にして、つまり煙を薄くして空に放つというものだった。煙突内に50馬力の送風機があった。煙害予防調査会が知恵を絞って考えたものだった。

新しい煙突は直ぐに実行に移された。たしかに煙そのものは薄くなったが、結果は散々だった。煙はやはり煙突を出たあと、山肌に滞留した。滞留したまま煙突そのものを煙で覆ってしまうこともあった。これならまだムカデ煙道の方がよかった。みんなは直ぐにそう思った。条件の違ういろいろな日に確かめたがやはりだめだった。煙突は1か月で使用を中止にした。政府なんぞの命令など聞く方が間違っていたと、口の悪い人たちは言った。姿形から「ダルマ煙突」というものもいたが、「命令煙突」と陰口をたたくものも。多額の費用をかけて、ダルマ煙突は失敗だったのである。

そのころ角の作った気象観測所では、

地上の気象観測の他に新たに高層気流の気象調査をするべきとの意見が出た。日本ではまだやっていない気球による上層気流の観測である。気球を輸入して観測を開始した。これまでは大気の高い部分の気象、とくに風向きなどまるで分かっていなかったのである。それも場所によって、高さによって違う。ある一定の高さには気流が逆向きに流れる、逆転層があることもわかった。これまでも、高い煙突ではどうかという意見があったが、反対も多かった。高い煙突だと亜硫酸ガスを、より広範囲にまき散らすことになるのではないかと。ヨーロッパでは高い煙突を立てているという情報もあった。

多くの反対を押し切って、高い煙突を立てようと決断したのは、久原だった。高い煙突を建てることは、膨大な費用もかかる。ひょっとしたら会社の経営にまで、影響を与えかねない出費であったからだ。社運をかけての煙突である。

点で海拔はすでに481メートルあった。基礎工事だけで3か月かかった。そうしている間に、ヨーロッパで戦争が起った。オーストリアとセルビアの間で戦いは始まり、直ぐにヨーロッパ全土に広がった。第1次世界大戦である。銅の需要は大幅に増えた。そのころは、国策として鉱工業の発達推進が押し進められていたから、国民は少々の煤煙の犠牲は仕方がないという雰囲気も今よりはあった。工場閉鎖などは考えられなかったのである。

煙突のまわりに足場を組み、煙突の伸びるのと足場の伸びるのはほぼ平行に進んでいた。煙突は毎日1メートルずつ高くなった。大正4年3月1日、快晴の日に、大煙突は開通した。煙は神峯山の上のさらに156メートル上から吹き出した。わずか1年足らずで、延べ動員数3万6800人という人たちの努力の末完成したのだ。日立鉱山の社運をかけた大煙突だった。煙は空の高いところで、風に乗って流れていた。まずまずの成功だった。以後、麓の村々では煙被害が目に見えて少なくなった。

角弥太郎は農事試験場でできた杉の苗16万本を村人や社員に配布した。枯れた山々を蘇らすためであった。そして桜に関

しては、角はそれまでも、たくさんの方を村人や、社員に配った。オオシマザクラの種からの育苗が、自前でうまくいくようになる、その苗木にソメイヨシノの枝を接ぎ木して、ソメイヨシノも配った。日立鉱山の工場の周辺や、社宅、日立病院、学校、それに鉱山電車の沿線にも。その数はその後長い間に何万本にも達した。高い煙突ができて、煙害が少なくなってきたから、植樹はますます盛んになったともいえる。日立の工場関係以外の、学校や、公園にも配られた。神峯山周辺の山々も桜の植え付けがつけられた。日立の職員だけではなく、村人も、町の人間もみんな動員してつけられたのである。

農事試験場ではさまざまな植物の対煙状況が、長い間のデータと観測のもとに記録がとられた。その中のひとつが、次のデータである。

煙害に強い植物は、一番強いものが椿とヒサカキ、次がオオシマザクラとヤシバシ、ミズキ、コナラである。反対にもっとも弱い植物は、栗、つづいて赤檜、カラマツ、梅などであった。オオシマザクラとヤシバシが煙害に強いというのは、私は三宅島で聞いた。島の植物探索グループの人から、噴火した後の土壌に最初に生えてくるのはヤシバシだと。ヤシバ

ブシはハンノキのことである。冬になっても最後まで、小さな松かさのような実の殻が残っている木である。

日立鉾山は、この後も伐採後の山林を次々に買取り、木を植えた。その面積は四百五十町歩、さまざまな木を植え、昭和6年ごろまでつづけたのである。その間にも御大典記念に、ソメイヨシノを県道沿いに植えた。作業はみな市民の勤勞奉仕、ボランティアである。企業と市民側とが一体になって木を植えたのだ。それらもみな会社側の角弥太郎と、被害者住民側の代表関右馬允との長年の付き合いの中で生れた。関右馬允も生涯をかけて公害に立ち向かった。ある時は住民から会社側とツルんで、裏で金をもらっているのではないかと疑われたこともあるくらいだ。彼の辛抱強い努力もまた評価しなければならぬ。なにしろ彼は自分の進路をあきらめて人生そのものをこの煙害に立ち向かうことにかけてのだから。

2017年4月「全国さくらシンポジウム in 日立」が行われた。毎年、「日本花の会」とその全国にある支部が、市町村の協力のもと実施している大会である。全国から桜に関わる人々や、マニアが参加する。そこで私も初めて、日立市は、その市内のいたるところに桜があるこ

とに驚いたのである。もちろんその背後にある山も桜で一杯なのだ。その桜は、日立鉾山の角弥太郎が中心になって植えたものであった。日立の駅前平和通という広い通りの大きな桜並木も、満開であった。日立製作所の守護神である街中の熊野神社にも行った。日立鉾山から日立製作所ができ、さまざまな関連企業もできて、大正に入ってから企業は多角化した。このとき製作所は、自分たちの企業の末永い発展を願って、もともとあった小さな熊野神社の敷地を整備し、新たに社殿を建て守護神として祀った。境内には桜を何本も植えた。大正7年であった。その桜が現在見事な花を咲かせていた。太い幹、苔むした灰色のでこぼこの幹が長い風雪を感じさせ、迫力持って、見る人の心に迫ってくる。これを見ると、手入れさえよければソメイヨシノの寿命は100年でもびくともしないことがわかる。

昭和9年、当時の日立製作所の工場長が、諏訪台の社宅の庭に、長い間工場責任者として、公害に真正面から取り組み、また膨大な数の桜を市内各地に植え続けたとして、角弥太郎の業績をたたえて、私費で「桜塚」を建てた。また桜の功勞者としては、農事試験場のその後の移転先である東海村石神農場にいた「苗木に

挿し木をする名人」の近藤権之丞がいる。あくまで現場で、たくさん桜の苗木を作った人だ。影の功勞者ともいえる。

日立はその後桜を植え続けている。昭和38年からは、「日立さくらまつり」が始まり、平成に入ってもそれはつづいている。桜による街づくりだ。市民の会もあちこちにできて、桜の調査をし、病虫害の実態も調べている。

平成13年には、「さくらサミット in ひたち」を開催。毎年神峯公園にはたくさんのお客が押し寄せている。また常磐線日立駅の次の駅である小木津駅の構内に生えていた1本の桜が、毎年1月から3月にかけて他の桜に先駆けて咲き、しかも花期が長い。ややピンクが濃いのので新種ではないかということになった。他所に移して育成し、2006年（平成18年）めでたく新種「日立紅寒桜」として品種登録された。今では市内各地で、日立固有の新品種として植えられている。ソメイヨシノのころはすでに花が散っていて、私は見損ねた。

いづれにしても、明治30年代後半から、日立は町として急激に大きくなり、同時に煙害と戦いながら、一方で、桜を植え続けた人々の長い歴史があった。日立市は本當の意味での桜の町である。